

## キリストの愛に溢れた パウロの、信徒のための祈り

エフェソ3章14～21節  
2022年9月25日  
松田 基子 師

使徒パウロは初代教会時代ばかりでなく、キリスト教史において最大の伝道者ですが、復活されたイエス様の、天からの御声を聞く迄は、律法に熱心なユダヤ教徒でした。パウロは熱心に律法を守りましたが、それは人間の考えに立った守り方であった為に、神様の御心とは正反対の事をしていました。神様が真の救い主として遣わされた、イエス様を信じるキリスト者たちを、神の冒涇者として迫害していました。

その所に、十字架に架かり、復活し、天に帰られたイエス様から、直接御声を掛けられ、自分の間違いに気付きました。そして、彼は『神の御子が十字架に死なれた事こそ、聖書に預言された罪の贖いであったこと、真の救い主は、神様の前に罪を贖ってくださるお方であることに、心の目が開かれました。』ユダヤ教時代のパウロは、神様によるイスラエル人の選びを誇りとして、

『イスラエル人だけが祝福の民だ』  
と思い込んでいました。しかし、使徒言行録の13章47節で、

「主はわたしにこう命じておられるからです。  
『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、  
あなたが、地の果てにまでも救いをもたらす  
ために』」

との御声を聞いて、イエス様から与えられた異邦人伝道の使命に、文字通り命を賭けました。

パウロの異邦人伝道は、行く先々でその地方にいるユダヤ人からの妨害を受け、また、土地の異教からの攻撃、迫害に遭いましたが、一方で真理を求める多くの異邦人達が、救い主イエス・キリストの信仰に導かれました。パウロほどイエス・キリストの福音宣教のために苦勞し、苦難を受けた人はいません。それなのに、彼は、ローマ書8章35節で、

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か」と言っています。

パウロはこの様に、キリストの愛を最も深く知る人でした。パウロはどんな時も日々、一瞬、一瞬イエス・キリストに結ばれていました。ガラテヤ書2章20節で、

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

と言っている通り、イエス様との一体感で生きていました。しかし、だからと言って、彼はそれを誇ることはありませんでした。

イエス様から異邦人伝道を託されたことに対しても、エフェソ書3章7節で、

「神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者として下さいました。この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」

と言っています。パウロはこの様に神様の前に遜り(へりくだり)、ただキリストの愛に溢れ、イエス・キリストによる全ての人の救いを語らずにはいられず、伝道していました。しかし、ユダヤ教指導者達にとって、パウロは自分達の伝統信仰を覆す危険人物でした。

パウロは彼らの陰謀によって捕らえられ、投獄されました。パウロとしては、

『全ての事が神様の御心の下に導かれており、全ては福音宣教の発展に繋がるため、そして、その事が神様の栄光を現す事になる』

と確信していましたから、全く動揺することなく、悲しむ事はありませんでした。そして何と牢獄で手紙を書いていたのです。その一つがエフェソの教会を中心とする小アジアの諸教会宛に書かれた、エフェソの信徒への手紙です。

パウロは異邦人伝道に力を注ぎましたが、  
『異邦人達がイエス・キリスト  
を信じたら、後は本人任せ・・・』  
と言う様な事はしませんでした。

『彼らが救われたのはイエス・キリストを頭として、聖霊によってキリストに繋がり、生ける信仰の交わりを成す教会に生きること』を教えました。その為にパウロは沢山の神学的な書簡や、また信仰の実生活に関する書簡を書いて各教会に回す様に、回状として、送り、信仰生活をフォローしました。エフェソの信徒への手紙は、信仰の成長に向かって書かれたものですが、パウロは今一つ心配がありました。それは自分の投獄という、この世的にはマイナスの事態に、悲しんだり、躓いたりして信仰を失う人がいないかと言う心配でした。

パウロはエフェソの3章の13節で、  
「あなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て(即ち投獄を見て)、落胆しないで下さい。この苦難は、あなたがたの栄光なのです」

と言っています。人は誰も目の前の状況で判断し、また決断するものです。

『パウロ先生はイエス・キリストこそ真の救い主だと語って投獄された。神様は何故、パウロ先生を助けられなかったのだろうか。助けがないと言うことは、イエス様は救い主ではないと言う事ではないのだろうか。助けがない神様を信じて意味がない』と信仰を捨てる人が出てくるかもしれません。

しかし、神様を見つめる信仰は、  
『神様は悪をも良きに変えて下さるお方です。』

パウロの投獄に依って、イエス・キリストの福音は普段は行くことの出来ない、獄屋にも福音がもたらされました。神様は常に次の誰かを御救いに招こうとしておられるのです。パウロは囚人になったことで、国の最高権威者達の前で、イエス・キリストを証する事が出来ました。

キリスト者となって何を誇りとすべきか、それは、  
『神様の御名が崇められ、イエス・キリストの御救いが、誰かの上になることです。』  
天を見上げる時に、この世の事態に動揺することなく、ただ神様の御名を讃える事ができます。

パウロは牢獄にいて天を見上げた時、神様の御手の中にあり、御旨に導かれる平安と確かさがあり、イエス様の愛は、一層深く胸に迫ってくるのでした。その愛に溢れると、愛する信徒さん達の為に祈らずにはいませんでした。

エフェソ書3章14節で、パウロは、  
「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります」

と言っています。詳訳聖書では、  
「こう言う理由で、即ちあなた方がキリストにあって一つに建て合わされている、この計画の偉大さの故に、わたしは、わたしたちの主イエス・キリストの父の御前で跪いて祈ります」  
と訳されています。ユダヤ人も異邦人も、一つに建て合わされる、つまり教会として建て上げられると言うことです。このことはパウロにとって秘儀でした。

ところでどんな信仰にも祈りがあります。それは自分の願いを信仰する対象に訴え、叶えて貰おうとする行為です。ここで大事な事は、その祈りを訴えていく存在です。人間は自然界の脅威にさらされて来ました。そこには命の危険がありました。人々は太陽、月、星、雨、風、海や川などに霊の存在を感じて荒ぶる事がないように、神々に祭り上げて無病息災、家内安全を祈りました。

人間の欲望は、それで満足出来るものではありません。富が欲しい、名誉が欲しい、あれが欲しい、これが欲しいで、それを叶えてくれる神々を造りました。彼らにとって祈りは、欲求充足の手段です。自分の欲求が叶えられれば、それはその人にとって神になりますが、叶わなければ、最早その人にとって神ではありません。何処までも人間主体です。しかし、キリスト者の祈りは根本的に違います。

パウロが祈る相手は、イエス・キリストの父なる神、創造主である全能の神様です。どんなこともお出来になる、無から有を呼び出される神様です。必ず最善に導いて下さるお方です。キリスト者の祈りにも、勿論願いごととも許されてい

ますが、人間の側が、神様に命令をするのではありません。神様の主権、神様の最善に委ね、神様の御心を尋ね求め、神様の御心に叶う者に変えられていく、そのための祈りです。パウロはその祈りに生かされて、エフェソを中心とする小アジアの諸教会の為に祈りました。

パウロは教会を心から愛する伝道者でした。教会はキリストを頭とするキリストの体です。建物にも例えられています。彼はその教会の尊さを知る故に、神様の前に跪いて祈りました。15節に、

**「御父から、天と地にある全ての  
家族がその名を与えられています」**

とあります。岩波訳では、「家族」が「種族」と訳されています。つまり、天使も人間も全てを指しています。名を付けるのは、存在させ、支配する意味があります。ですから、創造主なる神様が全ての造り主であり、存在させ、支配しておられると言うことです。

パウロは世界の全てのイスラエル人も異邦人も、同じ様に父なる神様に存在させられ、愛されていることを教えています。神様は世界を愛しておられます。16節に、

**「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、  
その霊により、力をもってあなたがたの  
内なる人を強めて」**

とあります。神様の偉大さ、その栄光は、人間が計り知る事は出来ないものです。パウロはローマ書11章33節で、

**「ああ、神の富と知恵と知識の何と深い事か。  
だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を  
理解し尽くせよう」**

と感歎の声を上げています。

パウロはその究め尽くせない、神様にどんな大きな事を願うのだろうかと思ったところ、その霊により、力をもって

**「あなた方の内なる人を強め」**

と内なる人の強められる事を先ず祈っています。この内なる人とは何を意味するのでしょうか。詳訳聖書には、

**「あなた方の最も奥にある、本質と人格に**

**内住される聖霊御自身によって、大きな  
力をもってあなた方の内の人を強くし、  
強めて下さいますように」**

と訳されています。イエス様が天に帰られると聖霊が人の世に降って来られ、キリストを信じる者の心、その最も奥にある本質と人格に内住してくださり、本人自身では変えることが出来ない本質と人格を聖め変えて下さるようになったのです。

**心を強め**と言うのは、人間的に強くなる、自我が強くなるという意味ではありません。

神様の御心に従い続ける、諦めてしまわない心の事です。ところで心は空室にする事が一番危険です。そこで、17節に、

**「信仰によってあなたがたの心の内にキリスト  
を住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛に  
しっかりと立つ者としてくださるように」**

と勧めています。詳訳聖書には、とても心躍る訳が記されています。

**「どうかキリストがあなたがたの信仰を通して、  
あなたがたの心の内に現実に住んで、定住  
して、滞在して、そこを御自身の恒久的な家  
として下さいますように」**

と訳されています。

ところが、わたし達はイエス・キリストを信じると告白しながら、自己中心に生きて、困った時、悩む時、淋しい時等に、我に返ったかのように、

『イエス様、イエス様』

と叫び求めるのですが、日頃は、あの

[戸を叩くイエス]の聖画のように、

『自分の思い通りにしたい』

と、イエス様を心から追い出しているのではないのでしょうか。

わたし達はイエス様から、神様に全存在が救われる御救いを頂きながら、イエス様一途に懸けられず、心の核にイエス様の定住を望まないで、度々

『イエス様、すいませんが、

ちょっと部屋を空けてください』

と言って、自分が居座ってしまっている者です。神様の御心は、

『わたし達がイエス・キリストを信じ、キリストに繋がり、キリストに似た者となり、キリストの心で教会を建て上げ、キリストの教会に更に新しい人が加えられ、教会が成長して行くこと』です。その目指すところは愛の完成です。教会員一人ひとりが愛に根ざし、愛にしっかりと立つためには、愛の根源である神様、その神様の愛の実体であるイエス様を心の内奥、本質と人格の座に迎え、その座を全て明け渡さない限り、その性質が愛に変わる事はありません。

ところでそれを求めないのは、その素晴らしさを知らないからではないでしょうか。パウロはイエス・キリストと一つにされて、キリストの愛の素晴らしさを知ったのです。余りにも素晴らしくて、パウロは信徒さん達を皆、その恵みに引き入れてたくて仕方がないのです。18節に、

「また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し」

とあります。

ここにはキリストの愛を立方体で現しています。その立方体の中身が、コリント I の13章4節から記されています。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

イエス様はこれらの愛をこの地上の生涯を通して、十字架の死に至るまで与え尽くされました。

19節に、

「人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」

と勧めています。神の満ちあふれる豊かさとは何でしょうか。詳訳聖書では、

「最大限の豊かな神のご臨在を頂き、神御自身によって、全く満たされ溢れている体となる為です」

とあります。それはつまり、神様の臨在溢れる、キリストの体なる教会を目指している事が分かります。キリスト信仰は単独信仰ではありません。キリストを頭とする主の体の部分、部分に連なり、教会に生きる信仰です。キリストの愛はからだ全体、教会全体に行き巡ります。その愛を受けて変えられるのです。イエス・キリストに救われるとは、そう言う存在に創り変えられると言う事です。それが、神様が教会に与えようとしておられる恵みです。

わたし達はこれらの事を聞きますと、ほど遠い自分の現実に、「とてもなれない」と失望してしまうのですが、パウロは20節に、

「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることがおできになるかたに」

と言っています。自分の頑張りでは出来ません。聖霊の働き、キリストの内住を求めることです。わたし達は共に、その事を真剣に求めて、教会を建て上げ、キリスト・イエスによって栄光が世々限りなくあります様にとの祈りを共にしてまいりましょう。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

罪に滅び行くわたし達をイエス・キリストによって救い、キリストの体なる教会に連ならせて下さり、有難うございます。呉教会員一人ひとり、皆ともにキリストの内住と聖霊の働きを心から願い、キリストの愛にあふれ、神様の臨在溢れる教会へと成長させて下さい。

救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。